

書道講演会

「古文書」はじめの一步

地方文書にみる庶民のくらし

日時 平成二十六年三月二日(日)

会場 一宮スポーツ文化センター

講師 顧問・元一宮支部長 木戸竹葉先生

聴講者 一七九名(内一般聴講者四十一名)

江戸時代の庶民のくらしの中から、離縁状をはじめ、ア伊勢詣り等の旅に必要な往来手形の解説など、ご自身で作成されたみごとなプロジェクト映像を駆使されての、初心者にもわかり易い講演でした。

書道講演会開かれる

「森春濤とゆかりの人々」

連盟副会長 中村曾南

▼日時 平成二十五年一月二十七日(日)

▼会場 一宮スポーツ文化センター

▼講師 毛受英彦先生

一八五〇年頃、関西摂津の詩人河野鉄兜をして「天下畏るべきは二人、枕山・春濤なり」と言わしめ、文字どおり江戸から明治の詩壇をリードした、尾張一宮の詩人森春濤の偉業をご講演いただきました。娘孝子の夫である森川竹溪が明治四十五年に「森春濤詩鈔」を刊行した。二千三百七十

余首収集され、春濤の作詩活動がいかに旺盛であったかが伺い知れます。春濤を語るに、一宮市丹羽にあつた、鷺津幽林から四代(二代松隠、三代益斎、四代毅堂)にわたる「万松亭」から「有隣舎」での人々との交流は興味深いものがあります。特に「万松亭」では大沼枕山と共に学んでいきます。一八六三年名古屋市桑名町に「桑三軒吟社」を開



き百余人の門弟を得ています。特に四天王といわれる永坂石埭、丹羽花南、神波即山、奥田香雨又、娘恒子の夫となつた永井禾原も名をつらねている。(尚恒子は永井荷風の母である)東京で開業医であつた四天王

の永坂石埭らの招きで、下谷の摩利支天横丁に住み、「茉莉吟社」を起す。「東京才人絶句」を刊行し、機関紙「新文詩」の発刊を手掛ける。又詩会十日会(桃花会)を主催し巖谷一六・日下部鳴鶴などとも交流していた。

一時間三十分のご講演では、プロジェクトを駆使し二十数点の作品と図版を紹介していただき、目と耳で理解を深めることができました。参加者一七五名(支部員一三四名、一般聴講者四一名)でした。本部副理事長関根玉振先生、企画部兼公益法人推進担当部長横井宏軒先生のご臨席を賜りました。

書道講演会

「韓天壽の書業」

……松阪というところ……

連盟副会長 中村 曾南

▼日時 平成二十四年三月四日(日)

▼会場 一宮スポーツ文化センター

▼講師 鬼頭翔雲理事長

天壽は一七二七年京都に生れ、幼年より書を好み神童として名を馳せる。天壽の書は、王羲之を崇拜し正しい書の伝統を守り自らを「酔晋齋」と号し、温雅で運筆の呼吸が大きく、知的で整齊の美を持つと評される。当時、京で神童三人「書画の大雅、篆刻の芙蓉、

法帖の天壽」有りといわれた。一七四一年天壽一五才に三人は出逢い、その傑出した芸道と個性の交遊は生涯に渡る。松阪の豪商中川長四郎の養子となり、その経済的な支えは、江戸後半期に舶載された碑法帖の収集を許した。また晋唐の名品にくわしく模刻に巧みで

あった天壽の翻刻大成といわれている「岡寺版法帖」の完成に没頭することが出来た。

この版木は岡寺山継松寺に百枚程収蔵され、三重県の重要文化財に指定されているなど天壽の知られざる書業について話されました。講演会場では、曹全碑と王羲之の模刻の版木等が展覧されました。

聴講者全員が先生の巧みな話術に真剣に聞き入り、天壽のエピソードでは笑いもあり和やかなムードも作っていた、良かったです。

支部相談役佐野桃子先生は交流会のご挨拶の中で、

支部員を代表して「講演並びに天壽の書業に感銘を受けました」とお礼を申されました。

聴講者 一六六名

(一般聴講三十名)



書道講演会

「円空の生涯」

連盟副会長 中 村 曾 南

▼日時 平成二十三年一月三十日(日)
午後四時～五時三十分

▼会場 一宮スポーツ文化センター

▼講師 長谷川公茂 先生



円空は「わが母の命に代る架装なれや」と詠み、幼い心に無常観と救世の悲願を立て出家したと推察できる。一六六六年「江州伊吹山平等岩の修行の為始山登」と有り、上人の出身僧団であると考えられる。一六七四年に志

摩片田三蔵寺に伝わる「大般若経」を補修し添絵(釈迦十六善神図)をするが、南北朝時代の大般若経の見返絵とまったく同じであったといわれる。

こうした上人の古典の吸収と消化が、上人らしい簡明で簡略化した添絵の境地として出来あがった。簡略化してきた絵と彫刻である木端仏とが見事に融合して上人らしい省略法を自己葉籠のものとして確立している。一方彫像に見られる「高雅」なほほえみを生み出す精神は、「心と共に法の道(仏法の悟りを得た)月の京(浄土)の花の遊び…」と歌い、高い精神の心境を

みせる。円空の衆生を救うに「無常迅速」でなければとの思いと、多作が荒彫仏を生み出した。

常に大自然の営みのままに歩調を合わせる作品を「良し」として木端の中に仏を見ている。転じて書作についても、自然に臨書の効果が一定のリズムで統一された表現が出来る様にならない。「本もの」には鉄斎は十万枚、良寛は漆を塗るかためた程の反古の山、そうした下地が「本もの」を作り出す。

聴講者は一七〇名(支部員一三六名、一般三四名)でした。